

Title	大阪大学看護学雑誌 2巻1号 編集後記
Author(s)	太中, 千代子
Citation	大阪大学看護学雑誌. 1996, 2(1), p. 56-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56722
rights	©大阪大学大学院医学系研究科保健学専攻
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

編 集 後 記

1995年は兵庫県南部地震にあけ、オウムにくれた一年でした。地震による被害は建物のみにとどまらず、政界、財界をも揺るがし、日本国を根底から揺さぶりました。社会では急遽、危機管理について学習され、防災製品が脚光を浴び、防災対策マニュアル作成が急がれました。

医学界、看護界でも、この貴重な体験を今後に生かすべく、数多くの調査、研究が行われ発表されました。ボランティアで参加された看護学生、看護婦は、施設外での看護の役割、看護へのニーズを身をもって体験し、福祉も含めて実践学習の場として多くの学びを得ることが出来ました。今回のボランティア活動は、より地域に密着した医療の重要性を示唆するものであったと思います。

今、大学では、教育・研究・診療の3本柱の見直しから大学院大学の構想が打ち出され、身近なところでは保健学科の臨床実習も開始されました。

そんな中で看護学雑誌は2巻目の発刊となりました。創刊号は国会図書館を初め、全国国立大学病院、看護系大学や医療短大そして近県医療施設等へ謹呈し、賞賛、激励、是非同様の企画をと様々な評価を頂いています。大学と臨床の場は学生指導という点での関わりは深められてきましたが、研究のフィールドとしての交流はまだまだ少ないのが現実と思われます。看護大学の新設が相次ぐ中、大阪大学では看護学雑誌を介し、他大学の先陣をきり、研究交流が深められていくことを期待します。そのためにも投稿数を増やし内容の充実を図るのは勿論、保健学科・病院紹介に続く新しい企画も盛り込みながら、そして、社会の変化も反映しながら共に成長していければと考えます。

(編集委員 太中千代子)

編 集 委 員 会

委員長	早川和生 (大阪大学医学部保健学科地域看護学講座)
委員	安藤邦子 (大阪大学医学部附属病院看護部)
	太中千代子 (同上)
	阪下麻由美 (同上)
	松木光子 (大阪大学医学部保健学科基礎看護学講座)
	山地建二 (大阪大学医学部保健学科母性・小児看護学講座)
査読	小笠原知枝 (大阪大学医学部保健学科基礎看護学講座)
	原田徳蔵 (大阪大学医学部保健学科母性・小児看護学講座)
	鈴木敦子 (同上)
	相菌紀代子 (大阪大学医学部附属病院看護部)